2-O-2

共感と EMPATHY

永島 聡[1)]

心理療法における「共感」は、1950 年代に Rodgers のクライエント中心療法が米国から我が国にもたらされた際に、その中心概念として持ち込まれたものである、と言っていいであろう。当初は「感情移入」と訳されることも多かった。

「共感」という訳語があてがわれている元の英単語は“empathy”である。empathy は英語圏の人々にとって、相手の立場に身を置いて相手が感じ考えているように自分も感じ考える、という意味を持つ。そして日本語を使う我々も同様の意味に受け取っている。と疑問なく捉えて果たしていいのだろうか。

英語圏では他者に対して共感的に接する際の言葉がけとして、例えば“I know it’s hard for you.”等、「私」が「あなた」のことを想っているという表現が多い。つまり主体と客体が明確に分かれていると言える。一方で日本語においては、「しんどいね…」等、そこには「私」も「あなた」もない。主客の区分がなく、共感の場だけがそこにある、と言っていいのかもしれない。

共感と empathy とでは、そこで起きていることは全く異なるのではないだろうか。支援者側の気持ちの流れも違えば、被支援者側の気持ちの流れも違う。empathy をシンプルに輸入して共感とする、という姿勢を我々日本人はあらためる必要があるのではないか。

1） 保健科学部看護学科